

私のおうち劇場その5 配信されたオペラ「フィガロの結婚」

川口 ひろ子

2021年7月、南仏エクサン・プロヴァンスの音楽祭で上演されたモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」が、翌8月にオンデマンドで全世界に無料配信され、早速視聴した。

このオペラはフランス革命と時を同じくしてウィーンで初演された。貴族社会が崩壊し「自由、平等、博愛」を理念とした市民社会が始まった時代だ。この大変革期の空気を見事に音楽で表現した傑作としての評価が高い「フィガロの結婚」。しかし今回のエクスの舞台には社会革命的なメッセージは皆無だ。「世の中は変わったけど、とにかく面白可笑しく賑やかに行こよ」という乗りで、陽気で派手な舞台の展開となった。

伯爵家の使用人フィガロは同僚のスザンナと結婚の予定。ところが何とスザンナにご執心の伯爵が初夜権を振りかざして……、とトラブル続出だ。知患者フィガロは次々と起こる難問を総て解決、晴れて結婚式を迎える、というお話した。

充実していたのは音楽面だ。ザルツブルク音楽祭でも大成功している古楽の能手トーマス・ヘンゲルブロック指揮によるバルタザール・ノイマン・アンサンブルの演奏が素晴らしかった。歌手たちも合唱団も、指揮者を全面的に信用して、オーケストラの調べに全身を委ねて楽々と歌っている。

一方女流演出家への不満は多い。例えば伯爵、優しいお兄さんと言うキャラで、これでは不本意な権威に対するフィガロの懸命の抵抗も腰砕け、ドラマ全体がぼやけてしまう。また前半は伯爵邸内で演じられる徹底したドタバタ劇、後半は多肉植物を模した巨大なオブジェの前で展開する愛と言う曲者についての抽象劇だ。極端な落差には戸惑うばかりだ。

時代と共に私が変わるべきか。「フィガロ」に関する私の先入観を捨てて、お気に入りの演奏と、華やかなシーンを楽しめばそれで充分とするべきか。しかし今最も旬な女性演出家は何を主張したいのかを追って行けば、答えが得られるかもしれない。何かと頭が混乱する舞台であった。